20101217_農業情報総合研究所／地域ビジネス研究会_議事録
「鮫川村における地域ビジネスと大学の役割」

日 時：2010 年 12 月 17 日（金）19:00－21:00
場 所：東京・竹橋　ちよだプラットフォームスクウェア
テーマ：「鮫川村における地域ビジネスと大学の役割」
発表者：入江彰昭氏（東京農業大学准教授）
ゲスト：鏑木重正氏（鮫川村役場企画調整課）
参加者：参加者　19 人（発表者除く）
（NPO 法人理事長、農家、大学教員、会社員、公務員、大学生、
　公認会計士、行政書士、司法書士など）

理事長から開会挨拶、地域ビジネス研究会の趣旨、今回ミーティング趣旨

発表：「鮫川村における地域ビジネスと大学の役割」
①入江氏からの自己紹介／問題意識
・動機は、環境問題
・「沈黙の春」を読んで、動物、植物も一緒に生きていると感じる
・「奇跡のリンゴ」読んで、人は、リンゴの木のお手伝いをしているだけと感じる
・「国家の品格」。品格ある国家の４つの指標の一つ、「美しい田園」に共感する

・中山間地域は、農業生産の４割強を担う。また、農家の４割も存在する
・鮫川村の活動は広義の環境問題と捉えている。すなわち、国土保全ももちろんだが、
　中山間地域の知恵や技が失われていくことの問題
　また、自然との付き合い方が失われている

②鮫川村の紹介
・里山が多く残る。オオサンショウウオがいる。マイマイダケが生えている
・東京農大生による畦の管理
・今年（2010 年）、「自分たちで田んぼをやろう」と稲作体験も行なった
　２反ほどで、無事１０俵を収穫
　東京農大の収穫祭で販売した。売上げは鮫川村での活動費に当てる
・炭作り体験も行なう。炭窯の知恵、技が失われ始めている

・谷戸。やと。東京農大生の調査により４９７ヵ所を確認。雑木林と谷のこと

・ゲンジボタル、ヘイケホタルもいる。７月ごろ見ることができる
　あんなにもホタルが飛んでいるのは初めて見た

 All Rights Reserved, 農業情報総合研究所

ホタルがたくさんいるのは、田んぼと川の環境から
この環境を守っていきたいと思う
そのためには、里山の管理が必要。やぶを作らないことがポイントになる
また、U 字抗では、直射日光が当たってしまう。また、さなぎが上がれない
素掘りの川が必要

③鮫川村の概要

・阿武隈山系の頂上に位置する
・鮫川、阿武隈川、久慈川の源流に位置する。水がきれい
・農林業が、盛ん
・東京からのアクセスは、たとえば東北新幹線の新白河駅から車で１時間ぐらい

・人口減少続く。現在、4160 人。人口減少に若干歯止めがかかる
・農家の人口比率 63%。福島県で一番高い
・２ヘクタール以下の農家が、91.3%
・村の４割が牧草地。畜産が盛ん
・林家の人口比率 56.5%。森林の面積も同じぐらい
・木炭の生産は、県内１、２を争う

・鮫川村の農林業の特徴。小規模複合的。農＋畜＋林。なんでもできる、まさに百姓といえる

④鮫川村と東京農大のお付き合い

・1999 年、鮫川村とのお付き合いスタート。ふるさと体験バスツアーから
そのときに、鮫川村役場の鈴木治男さんと出会う
東京農大生を連れて行く。連れて行った東京農大生がみな、鮫川村は良いところとの感想を持つ
・2000 年春、地域ボランティア開始。田んぼを耕すお手伝い。「田んぼの学校」
ただし、年６回しか鮫川村に行けないので、普段は農家の方に作業をお願いしている
学生に、農業など現場の体験をさせることができる。農学につき机上の理論だけでないことができる

・「田んぼの学校」にて、農村整備センターの銀賞を取得した。賞金は、長靴やスコップの購入に当てた

・炭釜体験。技を持っているのは村内でもお二人しかいない
落ち葉を集め、子牛のベッドにする。さらに、これが堆肥の素になる
農業を身体と肌で感じることができる

・休耕田の活用も行なった。豆科、そば、ジャガイモなどを栽培

 All Rights Reserved, 農業情報総合研究所

・散策路の整備と案内板の設置を行なった。また、ベンチの製作も行なった

・ビオトープ作り。生き物観察園。東京、千葉の小学生が体験に来る。ほっとハウス（鮫川村の施設）に宿泊

・鮫川村の運動会、奉納すもう大会への参加

・イノシシ名人。イノシシの生態に詳しい。たとえば、イノシシはマムシの子が好物
80 年代、90 年代に現れる。それまでは、ほとんどいなかった

・地元農家の庭造りの手伝い。造園学科の特色を活かして

・お付き合いの中で。農家の営みへの理解ができる
すべてがつながっていることに築く

・2003 年、パートーナーシップ賞受賞。また、鮫川村での取組みが新聞の記事にも取り上げられる

・舘先生（東京農大教授）による短大のプロジェクト研究を行なった。田んぼの価値を探ろうというもの。それまで、地元の人は地元のコメをまずいと認識していた。この研究成果につき、鮫川村でシンポジウム開催

・穂坂先生（東京農大教授）によるお酒を造るプロジェクトを行なった

・小規模複合経営は畜産についても。牛が１０頭前後だと、村内の落ち葉を自分で集めてきて、牛舎にひく。しかし、２０頭からは、村外のおがくずを購入する
これに対し、小規模産業を村内に立ち上げることを考える。グラム産業化

・都市農村交流は必要。しかし、都市民に住んでもらうのは難しい
戦略的な交流を考える。１Day、１Week、１Month、１Year、そして、１Life
たとえば、遠足、観光、短期滞在、長期滞在、そして、定住
また、周遊できる環境を作る

・2003 年 7 月。鮫川村にて住民投票。70%の住民が隣町である棚倉との合併に反対
自立への道を選択
自立のためのアドバイザーに舘先生がなる

・廃校となった小学校を改装し、再利用
2004 年 6 月、地域再生計画、総務省大臣認定第１号を取得

 All Rights Reserved, 農業情報総合研究所

・鮫川村のスローガン「まめで達者なむらづくり」を設定
鮫川村は大豆が特産。ふくいぶきという品種は、イソフラボン一般の 1.5 倍ある
鮫川村役場職員が、短大へ。加工者としての研修を受ける

・2005 年 11 月。手まめ館。元々は幼稚園だった施設を改装
加工と、販売を加えて、鮫川村の六次産業の拠点とする
地産地消にこだわる。村内の生産品、加工品だけ置いている
村内自給 90%
当初売上 3000 万円の事業計画を作成。県からは売上予測を下げるように指導があった
実際は、第 1 期 4500 万円の売上。その後も売上は伸び、昨年度は 1 億円の売上を達成
年間 10 万人のお客が訪れる。リピーターが多い
学校給食との連携も行なっている。炊飯ジャーを手まめ館から教室へ

・大学との交流、連携の意義。若者は、村民に活力を与え、村民は、若者に生きる知恵を与えている

・舘山。鮫川村の中心部に位置し、鮫川村役場近くにある。戦国時代には櫓があった。
しかし、近年は鬱蒼とした森となり、付近の日照を悪くしていた
この舘山を東京農大生の実習として、小学生の意見をワークショップ形式で取り入れつつ、景観整備
2006 年 4 月、福島県森林環境税事業として、500 万円の交付金を取得
東京農大生と村民ボランティアにより、伐採作業などを行なう。また、遊歩道整備も行なう

・2010 年、鮫川村と大学は、地域再生連携協定を締結した

○まとめ／里山景観保全活動の気付き
・農林業（元々の産業）をベースとし、大事にすることが必要
・里山を文化として認識。この文化を持続するためには、村外からの風が必要
・美しい里山の風景と食する森づくりが必要

 All Rights Reserved, 農業情報総合研究所

質疑応答（回答は、入江氏と鏑木氏が行いました）;
Ｑ１：農家の受け入れ体制を教えてください
Ａ１：行政が窓口になっています。行政から農家に紹介しています

Ｑ２：村内の農業生産物の消費は、村内と村外どちらが多いですか
Ａ２：村外です

Ｑ３：地域活性の指標とかはないのですか
Ａ３：高齢者にもっといきがいをもって、健康にがんばってもらうということも目的の一つです。ですので、高齢者医療費の削減が指標になるかもしれません

Ｑ４：鮫川村における農業の新規就農は増えていますか
Ａ４：Ｕターンでの新規就農があります。少ないですが、新規参入もいます。ただし、村内の受入れ体制がまだ整っていないです

以上

 All Rights Reserved, 農業情報総合研究所